

優秀賞 国土交通省水管理・国土保全局水資源部長賞

私が水に思うこと

徳島県 上勝町立上勝中学校

一年 笹尾 咲良

「プルルルル。」また、父の携帯が鳴った。さつきから、もうこれで何度目だろう…。一昨年の学童保育「上勝あすなろクラブ」の一泊遠足。愛媛県にある伊方原子力発電所を見学するこの遠足を私は何日も前から楽しみにしていた。その帰りのバスの中のことだった。横で聞き耳を立ててみると、どうやらどこかの水道の水が漏れているらしい。「どうして、こんなときに限って。」と私は心の中でつぶやいた。夕食に寄ったサービステリアでも、父はあまりごはんを食べなかった。楽しく会話する私たちの輪を避けるようにして、何度も何度も電話をかけていた。水道工事のだんどりをしていたのだ。私の父はこのころ上勝町役場の建設課水道担当をしていた。

家に着くと、父は無言でカッパを羽織り、飛ぶようにして現場に向かった。家族みんなそんな父を見送った。私はその時本当は仕事に行ってほしくなかった。大雨が降っていたので土砂くずれが心配だったからだ。その数日前も近所で大きな土砂くずれが起こったばかりだった。その日の夜、私は目がさえて、なかなか寝付くことができなかった。父は結局、私が起きている間には家に帰ってこなかった。あとから母に、ずぶ濡れの父が明け方にヘトヘトになって帰ってきたことを聞いた。次の日の朝、父は普段通りの時間に何事もなかったかのように仕事に出かけた。

このようなことが重なるにつれて私は正直父が水道担当になったことをあまりうれいとは思わなくなっていた。遊びに行っている時も、いつ仕事が入ってくるかわからないし、いつもどこかに出かけるときは、なんだか落ち着かなくて心の底から楽しむことができなかったっていったような気がする。普段の日でも父は帰りが遅かった。以前はそうではなかったからよけいに寂しかった。

夜中にひんばんに仕事に出かける姿を見て一度質問をしたことがある。すると父は「水がどれほど生活に大切かということ」を話してくれ、「夜に出かけるのは、修繕工事をするとき迷惑がかからないように夜間に断水し、朝には使えるようにするためだ」と説明してくれた。自分の事しか考えなかった自分が恥ずかしくなると同時に、それだけ大切な「水」を守る仕事をしている父を誇らしく思った。

私たちが日常の飲料水として利用している水について父がこの仕事をするようになってから学んだことがある。小学校四年生の社会の時間に外部講師として私のクラスで授業をした父は「山の水は、一般的にはきれいだけど、飲料水として利用するには不適切で、どうしても微生物が存在している。」だから、「人の手を加えて安全に飲めるようにしなければならぬ。」と教えてくれた。私たちが住む「彩りの町」上勝町は水資源に恵まれ、全国百選の棚田や鮎の泳ぐ清流勝浦川など町のいたる所に、美しい水が流れている。私は放っておいてもこの自然が守られ、水も何の苦労もなく使用することができていると思っていた。しかし、その向こう側で水源地を管理したり、水をろ過する施設を常に点検したり、また定期的に塩素量を測定し、補給している人たちがいることをその時、初めて知った。

この間、父は「水を守る仕事」は大変だけど、「水を守る」ことは「生活を守る」ことであり、「命を守る」ことだとも話してくれた。私たちは今まで当たり前のように水を使ってきた。でも、「当たり前」の裏側では一生懸命水を守って努力を続けてくれている人たちがいる。一滴の水が使えるありがたさを心にとめることから私は出発したい。これからは、歯磨きや手洗いをする時でも水をできるだけ止めて使うようにしようと思う。友人達にも水の大切さを訴え、使い方、節水も呼びかけたい。勝浦川の源流の町、上勝に住む一人として「命を守る」ため「水を守る」一歩を私は今、勇気を出して踏み出したい。